

## 図書館と軍事関係資料

本年3月の訪英時に、戦略論で有名なリデル・ハート教授が教鞭を取っていたキングス・カレッジのドッキル教授から、リデル・ハート戦争資料室を案内された。それは、われわれが来校者などに図書館を案内するのは、その学校の知性がかかるからであり、図書館がその学校の知性を表徴しているからであろう。ドッキル教授が案内を申し出ただけに、リデル・ハート戦争資料室には、ポア戦争から現代戦にいたるまでの、各種の戦争や戦闘にかかわった国家指導者や、各級指揮官などの手記・報告書などの各種資料から戦闘記録、日誌などの資料約1,000ケースが収集され、各資料は電算機によって管理されていた。資料保護のため教授の紹介(保証)者に限り閲覧を許されるとのことであったが、この膨大な資料を見て、このような膨大な資料のうえにあの有名なリデル・ハートの戦略論が生まれ築かれたのを知るとともに、この資料に接し得る人と接し得ない人とのハンデ・キャップの大きさを考えずにはいられなかった。

図書館が学校の知性の表徴であり、学校の誇りとの観点から、日本の大学などでも蔵書量では勝負がつかないため、軍事問題に限れば都立大学の陸軍元帥上原勇関係資料、大東文化大学の海軍調査課長高木少将関連の海軍資料を保有し、特に大東文化大学の場合にはその資料を『昭和政治経済関係資料史料集』として編集発行しているが、学会から高く評価され絶版になった部分などは定価の数倍の値段がついている。

最近の東欧における共産主義の消滅からか軍事アレルギーも急速に薄れた結果、本校に対する軍事問題、特に戦争などに関する問い合わせが増加の傾向にあるが、本校にはそのような蔵書が多いと考えられているからであろう。しかし、本校が戦後に創設されたため戦前に発行された図書は極めて少ない。歴史や戦史の研究者にとって図書、文書、資料は戦場における弾薬のようなもので、弾薬なくし

平 間 洋 一

て戦えないように資料がなくては論文は書けないのである。このため歴史研究や戦史研究をするうえで戦前に発行された図書などは不可欠なものであるが、現状では前に述べた通り他大学に比べ充実されているとは言えない。そこで図書館では一昨年、旧海軍の親睦雑誌『水交』にこのことを掲載し、旧陸海軍の方々から旧軍関係の資料等を無料で寄贈を受けて充実に努めて来た。

現在までに海軍兵学校51期の大井篤氏、安延多計夫氏、海軍兵学校75期会からなど40近い団体や個人から寄贈を受け、これらの寄贈図書と旧海軍大学校や陸軍経理学校の図書を中心に、図書館本館3階に「旧軍関係資料室」を開設した。旧軍の方々や大井篤氏、安延多計夫氏の例を示すまでもなく、貴重な蔵書を学生の教育に役立つならばと、すべて無償で寄贈されている。図書館は大学の顔であり、大学の知性の表徴である。この旧軍関係資料室が日本の学会に誇れるものとするためにも旧軍関係資料充実運動に一人でも多くの方が参加されることを念じつつ筆を置きたい。

(海上防衛学教室 教授)

